Miyazaki Women's Junior College

昭41	「飫肥城」（読売新聞社刊『古城にうたう』に収録）	
昭45	「封書」（永田書房刊『感恩集』に収録）	9月檀一雄宅に関係者集まり『中村地平全集』全3巻の刊行について協議。 2月『中村地平全集』第1巻、4月第2巻、7月第3巻を皆美社より刊行。
昭46	発端（『ポリタイア10』特集・坂口安吾・中村地平）	

(注) 年譜中略称は以下のとおりである。

● 望（宮崎中学校友会雑誌『望洋』足・翔（台湾総督府立台北高等学校校友雑誌『翔風』『足跡』）作（小野松二主宰の文芸雑誌『作品』）四（津村秀夫・津村信夫・植村敏夫らとの同人雑誌『四人』）行（『行動』）鷭（『鷭』）界（『文学界』）浪（『日本浪漫派』）懇（『文芸懇話会』）潮（『新潮』）芸（『文芸』）紀（『文芸世紀』）知（『知性』）現（『現代文学』）広（『文化広場』）座（『座右宝』）代（『世代』）世（『世界』）公（『中央公論』）婦（『婦人』）女（『女性ライフ』）人（『人間美学』）画（『婦人画報』）会（『文学会議』）改（『改造』）日（『日向日日新聞』）群（『群像』）間（『人間』）造（『女性改造』）園（『小説公園』）毎（『毎日新聞』）朝（『朝日新聞』）坪（『坪田譲治全集月報第1号』）熊（『熊本日日新聞』）太（『太宰治全集月報第二号』）図（『図書』志賀直哉特集号）西（『西日本新聞』）春（『文芸春秋』）

● 作品中右横線 ――『中村地平全集』第二巻収録を表す。

● 以上の年譜は、皆美社刊『中村地平全集』第三巻（昭和46年7月7日）「黒木清次・久保輝巳編　中村地平年譜」等を再構成したものである。

（平成五年十二月十日受理）

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

	年	歳	作品	その他	交友関係他	職業暦
宮崎	昭30	47	山の中の古い池（群）告別式前後（世）	随筆「卓上の虹」（日・熊）エッセイ「浪漫的と古典的」随想「坂口安吾の風土記と宮崎」（以上朝）「地方と作家生活」（群）「〝喝采〟前後」（太）		8月　養父森由起雄（62歳）死去。
	昭31	48	白鷺（世）	「志賀さんと私」（図）『卓上の虹』（日向日日新聞社）「志賀さんと子供の国」（西）	志賀直哉ら来宮。	
	昭32	49	『日向』（角川文庫・角川書店）	随筆「朝のことば（七十四回）」（毎）黒木清次との対談「図書館の十年」（日）	里見弴・有島生馬・東郷青児ら来宮。	9月宮崎県立図書館長辞任。10月父常三郎が社長を勤める宮崎相互銀行に取締役として入社。
	昭34	51		「日向記」（宝文館刊『日本の風土記・南九州』に収録）「年令」（風報編集室編『風報随筆』に収録）		昭35（社長就任を翌年にひかえ社業専念のため文学上の仕事みられず）
	昭36	53		「南国宮崎県」（小学館刊『図説日本文化地理大系・九州㈠』に収録）		1月宮崎相互銀行取締役社長に就任。（現・宮崎太陽銀行）
	昭37	54		随想「社長家業十カ月」（春）		3月健康上の理由により宮崎相互銀行辞任。
	昭38	55		随筆「ある職場での経験」（潮）	12月『竜舌蘭』追悼号発行。	（2月26日死去）

NII-Electronic Library Service

宮崎							
昭22	昭23	昭24	昭25	昭26	昭27	昭28	昭29
39	40	41	42	43	44	45	46
義妹（座）女主人（代）父と子たち（世）民話集『河童の遠征』（菊書房）	『太陽の眼』（西部図書）女たち（公）若い未亡人（婦）山の出来事（人）岬の女（女）女の履歴（画）『義妹』（小山書房）『陽なた丘の少女』（養徳社）	朝の雀（世）帰国（会）	ある青春（改）八年間（群）田園日記（世）	高原の村（間）岬にあそぶ（造）山村物語（園）わたしの身辺（世）		女流作家の思い出（七回・毎・北九州版）	『日向民話集』（日向文庫刊行会）
			火野葦平との「文学対談」（日）		エッセイ「心のうちそと（十一回）」（朝）	「坪田譲治全集について」（坪）「地方作家の悲しみ」「再び地方作家の悲しみ」（毎）	
		下半期「八年間」及び単行本第24会芥川賞候補作↓該当作品なし。	2月小説「八年間」その他の作品活動により第1回宮崎県文化賞を受賞。	金子光晴・若山貴志子・海老原喜之助ら来宮。	11月「宮崎県立図書館を通ずる地方文化の啓発と向上」により第12回西日本文化賞（西日本新聞社）を受賞。	坂口安吾「新日本風土記」（中央公論）取材のため来宮歓談する。	
5月宮崎県立図書館長となる。	1月　旅行先宮崎県西諸県郡真幸村（現えびの市真幸）真幸温泉で喀血、以後療養生活にはいる。	夏頃より病状やや好転、作品を書き始める。					1月　母仲（68歳）死去。

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

	年	歳	作品	その他	交友関係他	職業暦
東京	昭15	32	老年・応召の蔭に（以上芸）『蕃界の女』（新潮社）太陽征伐（知）『小さい小説』（河出書房）長耳国漂流記（知）	コント「天城の向う」（芸）文芸時評「小説への嫌悪」（芸）エッセイ「南方的文学」（知）	この頃より広津和郎氏の知遇を得、爾来、人間的・文学的に大きな影響を得る。	
東京	昭16	33	『長耳国漂流記』（河出書房）「かしの木や靴店」（潮）「慰霊祭の頃」（界）『台湾小説集』（墨水書房）	随筆・評論集『仕事机』（筑摩書房）エッセイ「詩人と風土」（芸）エッセイ「感想についての感想」（現）随筆「セコの話」（芸）		12月から昭和17年12月まで陸軍報道班員としてマレーに派遣。
東京	昭17	34	『あおげば若葉』（博文館）	随筆「森の中の歌ーマレーのパンドンー」（芸）		12月マレーより帰国。
東京	昭18	35	馬来人サーラム（潮）『船出の心』（文林堂双魚房）	作家紹介「プトマイ・ピタン（印度の作家）について」（潮）エッセイ「時評的感想ーマライに在る友人へー」（芸）	この年より志賀直哉の知遇を得る。	2月森由紀雄（弁護士、元日州新聞社長）長女玲子と結婚、12月長女弓子誕生。
東京	昭19	36	『マライの人たち』（文林堂双魚房）『日向』（新風土記叢書五・小山書店）『愛のある眺め』（大鐙閣書店）『河童の遠征』（新民話叢書・全国書房）	「文芸時評ーベルツの日記ー」エッセイ「文学者と疎開」随筆「雲に聳ゆる高千穂の」（潮）随筆「開戦三年目」（潮）		3月日大講師を辞して妻子と共に郷里の実家に疎開。
宮崎	昭20	37	「明るい国」を日向日日新聞に連載			9月日向日日新聞社（現・宮崎日日新聞）入社・編集総務となる。
宮崎	昭21	38	『白百合先生』（西部図書）ブドウ液（発表せずのち『義妹』に収録）子供の像（同上）	坪田との対談「文学よもやま話」（広）	3月坪田譲治来宮。	2月西部図書株式会社創立に参画、編集顧問となる。9月日向日日新聞社退社。客員となる。次女槇子誕生。

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

東			京			
昭14	昭13	昭12	昭11	昭10	昭9	昭8
31	30	29	28	27	26	25
応召記（潮）『戦死した兄』（竹村書房） 岬の女行者（潮）蕃界の女（芸） 竜舌蘭（紀）霧の蕃社（界）	『熱帯柳の種子』（版画荘） 南方郵信（界）陽なた丘の少女（潮）離れ島にて（芸）	土竜どんもぽっくり・文芸時評（以上浪） 小説集『旅さきにて』（版画荘）	イルゼとその母（浪）悪夢（浪）	失踪（行）	旅さきにて（行）	南海の記（四）きつつき（作）
先輩への手紙「老秋声と僕らと」 随想「南方の春」（以上潮） 名作鑑賞「蓼喰う虫」（芸） エッセイ「情痴文学に就て」 「文学研究と文芸批評」（以上潮）	感想「大虚その他」（浪）書評「坪田譲治”善太と三平のはなし」（界） 随想「葬儀の朝」（浪）	エッセイ「中谷氏と魯迅と」（浪）	随想「茗荷谷日記」（浪） 感想「神」（懇）	感想「太宰治へ」（浪）	文芸時評「室生氏の〝深夜の人〟など」（鶴） 感想「新人無力」（界）	随想「若冠のこころ」（行）
	（「南方郵信」第七回・昭和三年上半期芥川賞候補作）	（兄・彦一中支含山にて戦死）		中谷孝雄・木山捷平・亀井勝一郎・保田与重郎らを知る。坪田謙治を知り以後長く知遇を得る。	この頃より真杉静枝と交わる。都新聞社先輩に北原武夫がいた。	檀一雄・古谷綱武・尾崎一雄・浅見淵らを知る
			昭11夏、創作専念のため新聞社退社のことを相談に郷里に帰省。父、兄の承諾をえて帰京。9月に退社。 昭12 10月召集令状。都城陸軍歩兵第23連隊入隊。胃病のため即日帰郷。 昭和13 4月より日本大学芸術科非常勤講師。		4月台北時代の知人土方正己の紹介で都新聞社（現東京新聞）に入社・編集局文化部所属。	（3月東大大学院退学） （3月東大美術史科卒業大学院へ）
小説取材のため台湾各地を旅行。						

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

2　中村地平作品関連年譜

	年	歳	作品	その他	交友関係他	職業暦
明41 2・7 誕生 宮崎	大9	12	小説習作（望）		（中学時代佐藤春夫の台湾小説を読み南方にあこがれる）	（3月大淀小学校卒業）
	大11	14	「山路の雨」（望）			
	大13	16	「彼」（望）			
4月 宮崎 4月	大15	18	小説習作（足・翔）「首途」（足・創刊号）「或宵の尾寺」（足・第二号）「浦」（足・第三号）	随筆「温泉漫筆」（足・創刊号）	台湾高校校長三沢糾・下村湖人の知遇を得る。この頃矢野峯人・林芙美子らを知る。	（大14 3月宮崎中学校卒業）（4月台湾総督府立台北高等学校入学）
	昭3	20	「発狂」（翔・第六号）「天理教」（翔・第七号）			
	昭5	22			東京での若い文学仲間との交友がはじまる。井伏鱒二の知遇を得同氏に師事した。	（3月台北高等学校卒業）（4月東京帝国大学文学部美術史科入学）
東京	昭6	23		井伏鱒二論（作）	川端康成に知られる。	
	昭7	24	熱帯柳の種子・蛍（以上作）鯨のCopulation・廃港淡水 詩 省線電車は睡りながら走っている・童話 白雲がなぜ窪地のうえに靉いているか（以上四）		佐藤春夫の知遇を得る。井伏門下の三羽烏と称せられる。太宰治・伊馬春部・小田巌夫ら若い作家仲間と交友。	

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

るといいやすがね。」

「まさか…。」

とぼけた会話をかわしたあと、緋目高の入った缶詰の空缶を、水をこぼさないように両手でかかえながら、家にもどる。書斉の机の横の水盤のなかにはなってやると、電燈のあかるい灯をうけた水のなかで、緋目高の群れ[76]は、千代紙をちぎってばらまいたように美しい。水盤のなかにいれられた緋目高は、これまた日がたつにつれて、順次に死んでゆく。白い腹をあおむけにして、水面にうかんでいる小魚の屍体を、指先でつまんで外にすてながら、瞬吉はなにかいやな、不吉な感じをうけとる。しかし、そんな仲間のなかで、体が大きかった一匹の緋目高だけは、寒い季節がきても、ながく生きのこった。いつまでもゆうゆうと、水面に浮んだり、水草の間へかくれたりして泳ぎまわっている姿をみると、瞬吉はそのしぶとい生命力に感嘆せずにはいられなかった。[77]

（未完）

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

出していて…。」

一枝にいわれて、瞬吉はひとりで雑沓する大晦日の夜の新宿の町に出た。ゆくところもない[72]ままに寄席にはいった。さすがは東京で、瞬吉におなじく、借銭とりを逃げている人間が多いとみえ、寄席はあふれるくらいの人がはいっていた。

寄席がおわり、表にでてみたが、まだ十一時をまわったばかりであった。十二時までの時間をどうして消すか、人混みのなかでしばらく思案していたが、ふっと明治神宮に参拝することを思いついた。神宮にいってみると、参道の両側には大きな篝火がたかれており、肩をふれあうばかりの参拝客が、あとから、あとからとつづいていた。砂利をふむ足音が連続的に、階律的に暗い闇のなかの木立に木魂する。心があらわれるようなよい気もちである。拝殿のまえにたたずむと、瞬吉は柏手をうち、「文運長久」を祈った。拝殿をおりるために向きをかえた瞬間、ふっと、ある考えがうかんだ。もういちど拝殿の方に向きをかえると、これまで自分に親切にしてくれた先輩作家や、文学仲間記者仲間など多くの[73]人人の名前を、K・O・Iというふうにいちいち口のなかであげた。そしてそれらの人人が、幸福であるように祈った。ふる里で自分のことを心配してくれている父や母、兄、それから満州にとついでいる姉たちの名前をあげた。ながい、ながい黙禱を瞬吉はささげた。他の人人の幸福を祈ることによって、自分の不幸が救われるような気がした。

恐れていた貧乏も、そのなかに身を投じてみると、想像していたほど大したことではなかった。それに必死に小説にとりくむことによって、きもちはいくらかづつ平静になってきた。不安定のなかにも一つの安定が、瞬吉と一枝との生活に生れはじめてきていた。俳人としても知られている、ある高名な婦人科医のもとへ、一枝はかよいはじめた。

「子供を生むことによって、瞬吉との結びつきをかためたい。」という女らしい祈りからであった。注射に通うことを瞬吉も黙認して[74]いた。こちらは「子供でもできたら、彼女との関係をあきらめる気になるかもしれぬ」という消極的な考えからであった。

夕食後の散歩に、瞬吉と一枝とは、目白や池袋の夜店をひやかしてあるくことがあった。夜店から、ひよこや、緋目高などを買ってかえったことがあるが、そんなことも瞬吉の心が生活を建設する方向へとむかっていたためであったろう。

ステッキを肩にかつぐ恰好で、瞬吉は夜店のまえにかがみこむ。

「夜店のひよこ、雌ばかりというじゃないの。」

「旦那、冗談おっしゃっちゃいけません。あれは一羽五十銭の安物ですよ。これはちゃんと、雄、雌と御指定でおいて売ってあげますよ。」

ボール箱に入れてもらった数羽のひよこを、瞬吉は大事に、両手でかかえながら、家にかえる。道ですれちがう人がふりかえるくら[75]い、ひよこは箱のなかで思いだしたように、にぎやかにさえずる。家にかえりつくと、水をのましてやったり、寒くないように蜜柑箱に綿を入れてやったり、電球をさしこんでみたり、大騒ぎである。そんなひよこも、しかし、一週間もすると、猫にとられたり、栄養失調をおこしたりして、一羽のこらず死んでしまった。

また、

「緋目高は、どうすれば赤くなるの。」

無駄口をたたきながら、金魚屋をひやかすこともある。

「ふつうの目高と、金魚のなかにまぜておけば、ひとりでに赤くな

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

いうことをかんがえると、小説のその場面があるいは事実だったのではないか、そのような疑いにとらわれたのである。一枝とS老との間に過ちがあったという確証はない。小説をそのまま事実として受け取る素朴な読み方も滑稽であるにちがいない。それになりよりも、すでに過ぎさった過去のことである。そのことにふかくこだわる気もちは瞬吉にはなかったがそれにしても、それが仮りに事実であったとしてもその仮定自体が彼女にたいする冒瀆であるかもしれぬ。瞬吉は彼女を責める気もちには毛頭なれなかった。人生の途上には思わない落穽がいくつかある。その落穽に人がおちこんだとき、そこからはいあがろうとすればするだけ、人はそれとは別のよりふかい落し穽のなかにおちこむ場合が多い。瞬吉とのめぐりあい自体が、一枝にとっては、一つの悲運であった。その悲運のなかであがき、くるしみ、這いあがろうと必死の努力をして、彼女はまたべつの深い落し穽のなかにおちこんだ。S老と過ちをおかしたとしても、そのような意味で、瞬吉にとっては理解できないことではなかったのであった。[69]

一枝とS老とが、どのような関係にあったか、瞬吉にとっては、永遠の謎であったが、組合が解散し、一枝が馘になったのは事実であった。

浪費家の一枝の手もとで、退職資金はまたたくまになくなった。これという生活のめどもない。瞬吉は階上で、一枝は階下で、原稿をかく毎日がはじまったが、生活が追いつめられてみると、原稿用紙にむかう気組みもいぜんとはちがってきた。小説をかく気もちも勢い真剣にならざるを得なかった。

一枝の着物はもちろん、瞬吉の洋服も、そのほとんど全部を、一枝は質屋にはこんだ。洋服を自分の金で作った経験はそれまでの瞬吉にはなかった。一枝が質屋にはこんだ洋服の一着一着は、父か兄かに作ってもらったものであり、それぞれに想い出がこもっている。ルーズな一枝が、それらを流してしまったとき、瞬吉は胸がいたんだ。その日の米代にこまって、女中から借りる日も多かった。また、歌舞伎の帰り、こんな経験もある。一枝も瞬吉も芝居が好きである。とくに様式化され、象徴化されている歌舞伎は、観るひと、もの　とちゅうに人生の苦悩をなまでつたえることがすくない。むしろそれをわすれさせてくれる度合の方が大きい。瞬吉と一枝とはよく、芝居をみにいった。そんな費用をかけないために一枝は家から握り飯をつくってゆく。そして三階のいちばん安い席をとる。ある夜、歌舞伎座の帰り、二人は劇場のちかくのすし屋にたちよった。もちろん入口で、十分に胸算用した上で中にはいった。すしをたべながら、みるともなくみていると、たいていの客が懐から、おうように十円札をとりだし、釣り銭をもらっている。勤めをやめてのちの瞬吉にとっては、十円札はまるでなにか手のとどかない宝物のようにみえる。十円札をはらう客たちの手許を見つめている瞬吉の目付はおそらくさもしい光をおびていたにちがいなかった。[70][71]

「世間の人は、みんなずいぶん金をもっているもんなんだなあ。」

表にでると、瞬吉は感嘆したようにつぶやいた。

「まあ、あなたって…。」

こらえきれないふうに、往来で大声をたててわらった。

職をはなれた瞬吉の生活を心配して、暮には兄が百円の為替をおくってくれた。しかし、それを全部つかってもたらず店屋の支払いはたくさんのこっていた。

「掛取りがきたら、わたしがうまく折衝するわ。あなたはどこか外

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

「あなたはほんとにお美しい。」

真面目にはうけとれないような素朴な、不器用な表現で、Sは一枝にぬけぬけとお世辞をいうのがいつもであった。

「それにあなたはほんとにやさしい。わしには、実の娘よりか、あんたの方がほんとの娘のような気がする。」

Sは一枝にそうも言う。もっとも彼の一人娘というのはレコード会社の歌手になっているのであるが、無学な父親を軽蔑し、ふんだくれるだけの金をいつもふんだくりたいと爪をみがいている。Sにしても娘にたいして父親としての情はうすい。一枝に吐露するSの言葉にはいくらかの真実はあるのである。[65]

一枝にたいしてSは、他の職員とは比較にならないくらい、多額な俸給を、支はらっている。そして自分の身があぶなくなり、組合が解散される見通しになったとき、彼女にだけはいちはやく、特別に、法外な退職資金を支給した。

「この退職資金で、半年ぐらいはなんとかやってゆけると思うのよ。」

勤めをやめたとき、一枝は瞬吉を安心させるために、そんなふうに語った。瞬吉がこわがっていた貧乏のなかに、彼をひきずりこんだいま、一枝は自分自身の不安や動揺やをおしかくして、できるだけ瞬吉を、安心させるように心をくばらねばならないのである…。

そのころ、すなわち退職資金をもらい、勤めをやめた前後、一枝の態度にはいくらか不可解なな、異様なところがあった。興奮し、神経質になっているさまは、瞬吉にある種の疑念をおこさせたくらいであった。[66]

「わたしは、悪い女だわ。いけない女よ。あなたのような方と、とても一緒になれる女じゃないわ。」

なにかはっきりしないが、良心にとがめるところがありでもするかのように、彼女はヒステリックに、かき口説きでもするもののように祈った。

「わたしそのうち、きっと一人でしゃんとたちあがるわ。いつまでもあなたに、迷惑をかけることはしないわ。」

「悪い女」といういい方は、青年の甘い、浅薄な心を阿りとしてくすぐるような効果があったが、そんな言葉をききながら、瞬吉の心にふっとある疑念がわいた。

「一枝はSと、なんか特別な関係があったのではないか。そのことにこだわって、こんな贖罪的な言葉をはくのではないか。」

瞬吉はそうかんがえた。この考えは相手を冒瀆すること甚しい。もちろん言葉にだすべきではないし、独り胸のなかにたたみこんでおいたが、くろい汚点のように、瞬吉の心の一隅に、しばらくの間はしみついていてはなれなかった。[67]

それから数年たち、一枝と別れたのちのことである。Sのことはわすれるともなくわすれて去っていたが、あるとき、ある雑誌で一枝の小説をよんだ。作品に現れる主人公のモデルはたしかにSであると思われたが、その一節に、これは作者自身ではないかと想像される女性が、主人公の老人とともに、寝室のなかに入ってゆく場面があった。それをよんだとき、瞬吉はハッとした。

「ああ、やっぱり…。」

数年前の疑念が瞬吉の頭にはっきりとよみがえってきた。その場面は、あるいわは作者の空想によってかかれたものであったかもしれぬ。しかし、その事件がおきた当時の一枝の態度を回想し、また一枝が私小説を得意としていること、その私小説は虚構をまじえることなしに、事実のとおりにかかれていること[68]が多いこと、そう

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

はいよいよ彼女とわかれることに腹をきめている。女にたいする自分自身の愛の薄さに比較して、その男の愛情の深さに感動したのである。谷間（「暗い時期」）[61]

（三）

湯ケ島に二十日ばかり滞在し、瞬吉は短編小説を書きあげた。それをもって東京にかえると、駅には一枝が迎えにきていた。

「おめでとう。」

かるく、一枝は頭をさげた。

「いい作品がおかけになったんですって…。」

省線にのり、つれだって、目白の家にかえってみると、家には十五六の少女がやとわれていた。しなびた、顔色のわるい老婆のような子であった。

「この方、旦那様よ。御挨拶なさい。」

一枝は少女を瞬吉に紹介した。

「ああ、僕も旦那様とよばれる身になったのか。」

一枝の言葉は瞬吉の胸にささった。

二階の六畳の部屋にとじこもり、瞬吉は原稿をかいたり、本をよんだりしている。朝勤めにでかけた一枝は、夕方かえってきて、夕飯の支度をする。女に養われる身であることが、瞬吉の自尊心を傷つけており、そのこと[62]を反省するとときどきたまらない、いやな気もちにおち入っていた。一枝は待望の生活に入り得たわけであるが、彼女の心もかならずしも安定しているわけでもなかった。瞬吉の不安や、動揺やが、彼女の胸に反映するためでもあったが、彼女の勤めである組合の事業がまったくゆきづまっており、彼女の地位が不安定だったのでもある。

自分が養うつもりで、強引に瞬吉の勤めをやめさせてしまった。しかし生活の責任を負うべき自分自身がいつ職をはなれるかもわからぬ、彼女はそのことに胸をいためていたが、破局は、意外にはやく、しかも最悪の形でおそってきた。たんに事業がゆきづまったばかりでなく、組合の中心人物である理事長のSがながい間不正をつづけてきた。その不正が暴露し、刑事上の問題となって拘引された、勤め先はまったく困乱してしまったのである。

問題をおこした理事長のSといのは、もう[63]六十を半ばすぎている。髪はまつ白で、ずんぐりと背がひくく、胴にくらべて足がみじかい。いかにも漫画的な姿と容貌とをしているが、反面、身だしなみがよく、いつも上質の、外国生地のダブルの背広をきこんでいる、身辺には品のいい香水の匂いをただよわせ、高価な葉巻をくゆらせている。ある種の魅力、濫費と贅澤になれた男性だけがもっている、妙な魅力を発散しているのである。なりのハッタリ性とインチキ性とをもっていて、事業面や、政治面に腕をふるっている。ある大きな政党の院外団として、一種の地位をたもっている。党の有力な某幹部にとりいっており、その幹部の名を利用することによって、これまでも組合を維持してきた。つぎの選挙には、郷里のK県から、代議士として立候補する心づもりで、著者と手をうっていたが、その矢さきに、不正が曝露し、拘引されたというわけである。

学歴がないことに、Sは一種の劣等感をい[64]だいており、知的なものにあこがれているようなところがある。いぜんから彼は、一枝に自分の伝記をかかせたい希望をもっていたが、その希望とは別に、この小説家志望の、いくらかジャーナリズムに知られているわかい女性に、特種殊の興味と関心とをいだいていた。

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

「ええ、そうです。これをまっ直ぐゆけばいいんですよ。」
こたえながら、瞬吉ははっとした。男に手をひかれてたたずんでいる女は、よくみると、盲目なのであった。乳色の、ひえびえした感じの肌をしており、顔だちも美しい。息をのんでみていると、男は、
「どうもありがとうございました。」
小腰をかがめてていねいに礼をのべ、
「さあ、元気をだしていこうや。」
連れの女をうながした。
「お前もつかれたろうが、あともう一息だ。」
そのまま瞬吉は、呆然と二人の後姿をみおくっていた。
「いまから、夜の山径をのぼって、あの天城をこえてゆくのであろうか。」
街道のはるか彼方にそびえたっている天城の山肌は、すでに夕の暗さにしずみこんでおり、その上には悲しい茜色の空がひろがって[58]いる。その山を眼ざして、片手に杖をついているいたいたしい女と、その女をいたわりながら手をひいてゆく男、暮れなずむ夕の道をとぼとぼ遠ざかってゆく二人の後ろ姿は、まるで舞台の花道をゆく名優のようにうつくしい。瞬吉はうっとりとしていたが、
「それにしても、なんというやさしい男であろう。」
女につめたい態度をとりつづけてきている自分の身とひきくらべて、瞬吉はふかい感動に胸をうたれていた。そのまま、しばらくの間は、そこにたちつくして、二人の後ろ姿を見おくっていたのである。
湯ケ島の街道でみかけた二人のその旅の姿はその後ながく瞬吉の胸にしみついていたが、それから二三年たってのち、彼はふたたびその盲目の夫婦にめぐりあう機会があった。不思議な邂逅であった。
一枝との関係がいよいよ破局にちかづいた[59]ころ、瞬吉は先輩作家であるIさん夫妻と、一枝との四人づれで、伊豆一周の旅行をくわだてたことがあった。
熱海をふりだしに、伊東・谷津と泊りをかさねて、一行は湯ケ野という小さな温泉場までやってきた。湯ヶ野は山をへだてて湯が島と反対の側、つまり天城を越えた向いの山麓にある。湯ケ野に滞在していたある日、Iさん夫妻と一枝とは、附近の川に鮎釣りへでかけた。釣りに興味のない瞬吉は、退屈なままに、タオルをぶらさげて、ちかくの公共浴場へとでかけていった。粗末な建物のうす暗い浴室のなかへ足をふみいれると、石畳の洗場には一組の男女がいた。湯槽のなかからみていると、男が女の背をながしてやっている。女の年齢はかならずしも若くはないがさそうであるが、肌は乳色で、いかにもなめらかに美しい。うっとりするくらいである。そんな女の体を、男はまるで宝物でもあつかうように、丹念[60]にみがいてやっている。その丹念さが尋常でないのを注視していた瞬吉は、そのうちハッとした。体のすみずみまであらってもらったのち、女はひとりでたちあがったが、瞬間、足もとをふらつかせた。あわてて男が体をささえてやったが、女のそんな不器用な動作から、彼女が盲目であることに、瞬吉ははじめて気がついたのである。と、同時に、この盲目の女と、連れの男とは、いつか湯ケ島の街道で、瞬吉の胸につよい印象をのこしていった、旅の男女と同一人であることがわかった。
不思議な、偶然なめぐりあわせに、瞬吉は一種の感慨をおぼえたが、それよりか、このときもまた女にたいする男のやさしさが、胸をうった。瞬吉は女につめたい態度をとりつづけてきており、いま

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

「いちばんいい部屋に案内して頂戴。」

宿につくと、ケチな瞬吉がはらはらしているのもかまわず、一枝はいかにも彼女らしい云い方で、二階の奥まった上等の部屋を女中に案内させた。座敷のすぐ裏側には、まつすぐ建物と平行に、けわしい崖肌がそびえたち、そこにかかっている滝の水音が部屋の空気をはげしく叩いていた。

「滝の音が、耳についてねむれそうにもないわね。」

山肌になっているために、陽当たりがわるく、部屋に座ると、一枝はおびえたような眼の色をした。新聞社をやめて、収入の道がなくなった将来、一枝とどんなにして暮らしをたててゆくか、なんとはなしに不安な気持ちをもてあつかいかねている瞬吉は、そんな[54]一枝の眼の色のために、神経がいっそう不安にかきみだされる感じであった。その不安をあふりたてるように、水音がはげしく耳底をうつ。宿についた最初から不安な時をむかえた。

二泊だけして、一枝は東京にもどっていった。一枝が去ると、すぐに瞬吉は女中にたのみ、離れの安い小部屋にうつしてもらった。ひとりになってはじめての夜、寝床にはいって、瞬吉はドストエフスキイの「悪霊」をよみはじめた。そのころ瞬吉の文学仲間では、ドストエフスキイが流行していた。しかしロシヤやフランスの小粒な、小綺麗な作家が好きな瞬吉は、滑稽にも、その小説家の作品をただの一篇もそれまでよんでいなかったのである。それは瞬吉の旅行鞄のなかに、一枝は、その作品を入れておいてくれたのである。作品をよんでいるうちに、瞬吉の身うちに嵐のようなものが吹きあげてきた。その嵐は瞬吉を布団の上にはね起きさ[55]せてしまった。文庫本を枕元におき、布団の上にすわると、瞬吉は、

「これが小説家というものだ。」

思わず吐息をもらした。

「片々たる才能をもって、自分が小説家を志すなど、おこがましいことだ。」

新聞記者をやめたことは一生の誤りであったと、瞬吉は後悔した。またしても不安が胸の底からつきあげてき、天井の羽目板がぐるぐるまわるような錯覚をかんじた。あと瞬吉はようにねむれなかった。

しかし、その翌朝から、瞬吉は原稿紙にむかった。小説をかきはじめるのと同時にようやく、瞬吉は落ちつきをとりもどした。勤め先から、一枝は毎日のように他愛もない電話をかけてよこす。

「どう、お仕事はおすみになって…。」

朝から夜まで、瞬吉は一日じゅう机にむかっている。つかれると、湯にはいるか、表の街道を散歩するかする。[56]

ある日、夕食後の散歩のとちゅう、瞬吉は一種のふかい感慨にふけったことがあった。

渓流にそって、宿屋の表には埃っぽい街道が走っている。街道のところどころには、いかにも鄙びた駄菓子屋や、茶店などが点とちらばって建っている。渓流の崖にそって、粗末な、小さな公共浴場もたてられてある。街道を往き来する旅人たちが、たちよって汗をながすことがあるらしく、小屋の横手の崖っぷちの岩の上には、黒い脚胖や草鞋などがほされていることがよくある。

その公共浴場の前を、ある夕方、瞬吉はぼんやりと、ひとりあるいていた。背後に、人の足音が迫ってきた、と思うまもなく、女の手をひいた初老の男が追いすがってきた。男も女も旅の姿に身をかためている。

「天城をこえるのには、この道をゆけばいいんでしょうか。」[57]

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

説を発表し、ある程度文壇でみとめられた上でやめたほうが安全じゃないかね。」

文化部長であるとともに、劇作家としても知られているK氏は、そんな理解のある云い方をしてくれた。またK氏は深交のある小説家のO氏に、瞬吉が飜意するようにたのんだりもしてくれた。それらの人に瞬吉は云った。

「いま着ているオーバーが僕は暑くてたまらないんです。脱いでしまったら寒くなる[50]ことはわかっているんだが、いまの僕の気持ちではどうしてもオーバーが脱ぎたいんです。」

新聞社をやめたのと同時に、瞬吉と一枝とは目白に、小さな家をもった。階下が三畳の玄関に六畳、二階が六畳だけのゆがんだ、古い家であった。引越先のちかくに、一枝がいぜんから、親しくしていた家があり、その家庭と相談して、一枝の才覚で事をはこんでいったのである。瞬吉自身は新しい家にこしてゆくことに、なんの興味も、情熱もわかなかった。

二階の六畳には、紺の毛絨がしかれてあり、床の間にはいぜんM氏が所蔵していた中国の山水画がかけてあった。座敷の中ほどの花梨の机の上には、これもM氏から一枝がもらったフランス製のペン皿と、ま新しい原稿用紙とがそろえてあった。机の前の座布団に座りさえすれば、すぐにでも[51]原稿が書ける、そのように神経がこまかくくばられ用意がととのった、部屋に、瞬吉は案内された。

「どう、お気に入って…。」

一枝は瞬吉の表情をうかがいながら、浮き浮きした口調でよびかけた。まるで意志のない人間のように、ふらふら部屋にはいりこんできた瞬吉は、返事をすることもせず、座布団の上に座ることもせず、ついとそのまま、窓辺にいってたたずんだ。ガラス窓の向こうには、起伏の多い辺りいったいのゴミゴミした軒並や、甍、その間に点綴する緑の樹樹、鉄道線路などひろがってみえ、その上に目が痛いほどの秋晴れの空がかぶさっていた。

「これでいよいよ、女との生活もぬけられない運命におちいってしまったか。」

かんがえると、眼頭が涙でぬれてくるような思いであった。そんな瞬吉の思いは、敏感に一枝につたわっていた。

「あなたという人は、いくらわたしが一生[52]恩命につくしても、ちっともよろこんでくれないのねえ。」

新しい生活の首途にはぱりきっていた心を裏切られた一枝の泣き声が、すぐ背後に、きこえたのである。

二年余しか新聞社につとめなかった瞬吉は、退職金として三十五円しかもらえなかった。その金をポケットにいれると瞬吉ははやくも新しいその家をでると、伊豆の湯ケ島に小説をかきにでかけた。

「とにかく、いい作品を書くことだ。それ以外に救いはない。」

トランクのなかに、原稿用紙とペンとをおしこみながらかんがえていた。

瞬吉はひとりでゆくつもりであったが、湯ケ島には、一枝もついてきた。二人がとまった宿というのは、渓流にそった、ふるい小さな家で、そこにはずっといぜん、先輩作家のO氏や、そのころのO氏の奥さんであった女流作家のUさん、それから才能がありながら[53]わかいころに死んだK氏などが滞在していたことがある。それぞれにその宿や、宿の附近やを題材にした作品をかいている。そんなことも瞬吉がその宿をえらんだ理由の一つであった。

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

ひたり、女性との個人的な係りによる気もちの暗さをわすれることができた。個人の暗さが社会的なそれにおきかえられることは、それはそれでやはり一種の救いなのであった。

日本をファッシズムのなかに追いこんだ二・二六事件とよばれるこの出来事がいちおうおさまってのち間もなく、けっきょく瞬吉は思いきって新聞社をやめた。

「あなたにはすばらしい才能があるわ…。ね、勤めをおやめになって、小説をおかきになって…。」

瞬吉が社をやめたのについては、呪文のようにくりかえす一枝のそんな煽動が、功を奏したようなところも、いくらかあった。しかしそれよりか一枝はまだ小説家として一本立ちはしていないけれど、M新聞の雑文の寄稿家である。いっぽう瞬吉のほうは、雑文の寄稿家にとっては、いくらかコワモテ的な感じのする文化部記者である。そのようなポストにあって、女性の寄稿家と問題をおこし、いつかそれをすててわかれる日があることをかんがえると、やはり瞬吉にはうしろめたい気がした。小説家の卵と卵と対等の地位で、二人の恋愛を処理すればだれも文句を云うところはないであろう、瞬吉はそんなふうにかんがえたのであった。

新聞社を退職することを相談するために、休暇をもらい、瞬吉は故里である九州も南端の小さな町の家へとかえった。ひさしぶりに足をふみいれた家は、瞬吉が幼なかったころそのままの古風な秩序や、ひっそりした静けさのなかにしずみこんでいた。黒光りのしている大きな柱、几帳面な母が丹念にふきこんでいる長火鉢、針箱、それらのものが眼にはいると、都会生活で傷ついている瞬吉の心は、なにか気もちのいい塗り薬でもぬられるような快さのなかにおちついた。小説家になるために新聞社をやめると云いだしてみると、父は、

「たれでも菊池寛になれるというわけでもあるまいが…。」

父らしい云い方で強いて反対はしなかった。

「ただ新聞記者がいやだというだけなら、どこか出版屋にでもつとめてみてはどうだ。金は送ってやるから、一年間はただ働きということにして、その間に仕事をおぼえ、將来は自分で出版屋をやってみるのもおもしろくはないか。」

そんなことも父は云った。夏の夜のことで、庭をみる茶の間の縁側には、父と、瞬吉にとっては三つ年上の兄である瞬一、それに瞬吉の三人がすわっていた。茶の間で、母はお茶をいれていた。兄の瞬一が言葉をはさんだ。

「小説家というものは、品行のわるい人が多いんじゃないんかい。」

瞬一は女のように色が白く、善良で、気が小さい。都会地の高等商業を卒業したのち、田舎にかえって、いまは父の家業である洋品店をあずかっている。兄の言葉を耳にした瞬間、瞬吉は胸をさされたような痛みをおぼえた。一枝とのことを、すでに兄は知っているのではないか、ふっと脅えにたものをかんじながら、

「そうと一概にも云えないが…。実業家だって品行の悪い人は悪いんだし…。」

さりげなくこたえた。けっきょく、家族の誰も新聞記者をやめることを反対しなかった。

東京にかえり、辞任することを正式に申出たとき、K部長は言葉をつくして引きとめてくれた。

「記者として、君は社長も編集局長も買っているんだし…。文壇を志すのは僕個人は賛成だが、当分このまま社にとどまっていて小

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

の内部がざわめきたっている。しかし、ふかくは気にせず、瞬吉はそのまま、自分のデスクの前[42]にかけた。すると、

「瞬吉君。」

すぐ背後の、暖房装置のパイプによりかかってたっていたK氏が、鋭い声でよびかけた。

「軍隊が蜂起して、元老や大臣たちやがつぎつぎに襲撃されている。総理大臣もやられたらしい…。」

かんがえられないことであった。

「嘘でしょう。」

瞬吉は平然とこたえた。一枝とのことで、そのころ遅刻しがちな瞬吉を、K氏はからかっているものとばかり思ったのであった。

「嘘？こんなことが冗談に云えるもんか、君。」

平素は温厚なK氏が、叱りつけるようなはげしい語調で云った。さすがに瞬間、瞬吉の頭には新聞記者の職業意識がひらめいた。恥しさのために、両脇から冷汗がながれるのが、自分でもはっきりわかった。[43]

政治部や社会部のデスクから、つぎつぎに情報がながれてくる。はじめみんなが予想していた事態より、はるかに重大な雲ゆきである。

「軍をひぼうするような記事をかいたら、叩っきるぞと、おどかされてきたよ。」

取材のために出先きからかえってきた瞬吉とは同期のわかい社会部記者が、ひきつった表情で瞬吉の耳もとにささやいた。紙面に扱いにくいこの大きな出来事を、文芸面にいったいどんな方法で反映させることができるか、重苦しい空気のなかで、瞬吉も記者としての性根を燃えあがらせ、頭をひねった。けっきょく、常連の寄稿家たちに「二月二十六日の日記」をかいてもらうプランをたてた。部長の賛成を得ると、瞬吉はすぐに数人のジャーナリストたちに、電話のダイヤルをまわして、原稿を依頼した。寄稿家たちはそれぞれに心得ていて、あぶない事件には正面からふれることを[44]せず、さり気ない調子で、その日の身辺の出来事をかいてくれた。翌日活字になると、他の新聞の文芸欄は、その日の出来事はとりあつかっておらず、瞬吉の社の企画は好評を得ることができた。

その日、夜、アパートにかえると、すでにさきに家へもどっていた一枝は、ひどく興奮していた。昼間、彼女は事件のあらましを知ると、車をはしらせて、市内の要所要所を視察してまわったのである。

「女がこんなところにくるんじゃない。」

警備線のすぐ間近まであるいてゆき、武装した兵士に抜き身の銃剣をつきつけられたこともある。そんな視察談の一くさりを、一枝は興奮しながら瞬吉にかたってきかせた。野次馬根性というか、ジャーナリスチックな感覚というか、そんなものが彼女にはつよく、意欲をそそるような興味的な事件に出会すと、たちまち男性が眼をみはるような、貧婪（らん）な情熱と[45]積極的な行動性とを示す。戦後、彼女がヨーロッパやアメリカやをとびまわって、一部をあきれさせた行動性も、わかいころから彼女が示した生得のものなのであった。

蜂起した軍隊の本部も、これに対立する陸軍省も、M新聞社の近くにあった。辺りいったいには、戒厳令が布かれたが、その警戒線は社のすぐちかくにあった。事件がおきてのち数日間、社の内外はざわめき、殺気だっていた。事件そのものにたいする不安や憤り、また大きな事件が起きるときにのみ味うことのできる新聞記者らしい興奮、ひさしぶりに瞬吉は生き生きした生活感情のなかに

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

リカや、ヨーロッパの各地を旅行してあるいた。その旅行のとちゅうでも、彼女は派手な、豪華な和服をとりかえ、ひきかえ着て、人人の眼をみはらせ、海外のジャーナリズムにさわがれた。わがままな彼女の行動をもふくめて、そのことを海外で行をともにした一作家が、作品のなかではげしく、批難した。その作家と、瞬吉とは親しい間がらであったが、そのようにかかれた一枝にふかく同情しながらも、同時に苦笑ににた思いがわいてくるのを、瞬吉はどうすることもできなかった。他人をへきえきさせるような派手好きな、浪費癖が、たしかにいぜんから一枝にはあり、そのような彼女をケチで小心な瞬吉は、いつもビクビクした思いでながめていたのであった。

一枝とのことで、瞬吉はがくるしみなやん[39]でいることに新聞社の上役であるK文化部長は、心から同情していてくれた。

「君と山杉さんとは、おそらくうまくはゆくまい。そのうちわかれるにちがいないが、わかれても山杉さんなら独りでやってゆける。しかし、そんな場合、君はおそらく起ちあがることはできまい。」

そんな云い方で、K氏は一枝と手を切るように、瞬吉のため肩をおもって心配していてくれた。K氏のそんな云い方は、純粋に瞬吉の側にたった云い方で一見弱そうにみえるが、彼のじっさいはわかれたのち起ちあがれないのは瞬吉か一枝かはわからない。男として の強靭な瞬吉のエゴイズムをみのがした知らない言葉であった。ったが、それにしても、金銭のことをもふくめてたしかに一枝は、人生や世間にたいして、大胆である。そんな彼女のことを、瞬吉は、K氏に冗談めかしていったことがある。

「女は度胸、男は愛嬌というものです。一枝とのことでも、僕は世間がこわくて、心にもない愛嬌を人にふりまいたりしているん[40]です。びくびくして、ごまかしながら生きているのです。」

そういいながら、瞬吉は自分の顔がぶざまにゆがんでいくのが分った。K氏はそんな瞬吉をあきれはてたように見つめている。K氏に感謝の気持をのべようと思っても、ことばがのどにはりついたように、瞬吉はK氏の顔がまともに見られなかった。

その朝、目覚めると、窓ガラスを通して、寝ている瞬吉の上に、痛いような光がおちかかっていた。

「あら、すごい雪よ。」

一枝のうわずった声をきくまでもなく、二月も末というのに、たしかに、その雪は異常なほど下界を白一色にぬりつぶしている。家を出たところの道路も両側の家並からあふれ出た雪がうめている。そのためか、電車もとおらず、瞬吉はようやく拾った車で一枝と出勤した。とちゅう、桜田門[41]

とちゅう、お壕端にそって、桜田門の附近まできたときであった。疲れている眼をなに気なく窓の外にやると、門の附近いったいに、土嚢をかため、その間に抜き身の銃剣をもった兵士の群れが見え隠れするのがながめられた。銃の先につけられた短剣が、まっ白い雪のなかに、まぶしく、不気味に反射している。

「なにか起きたのでしょうか。」

「さあ。」

なにかわからないが、国民にとっての不吉な大事が起きそうな予感のする、不安な時代ではあった。しかし、瞬吉はその兵士の群に不審な眼をくれただけで、それ以上ふかく気にもとめなかった。間もなく二人は車をすて、それぞれ勤め先へとわかれていった。出社時間にかなり遅刻して、瞬吉が社へあがってみると、編集局

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

おびえていたのである。本人の意志にさからって、彼女は瞬吉を同棲生活に強制している。、その傷に耐えかねて、瞬吉は死をえらぶのではないかという心配はしていたのである。

「やっぱりあの人は死んだんだ。」

頬に涙がつたわってくるのを、ぬぐうこともせず、一枝は気がぬけたようにぼんやりして叢のなかにすわりこんでいた。間もなく、

「おうい、おうい。」

どこか遠くで、二人をよぶ多くの人の声がきこえてきた。いつの間にか、あたりはたっぷりと夜の闇につつまれており、はるか向こうの竹藪のあたりに、二人の姿をさがす提燈の火が点点とうごめいていた。一枝は、[35]しかしそのまま、じっとそこを動かないでいた——。

瞬吉の勤めをやめさせ、小説家をとしてたたせたい、せつない希望を一枝はいだいている。それが瞬吉に対する唯一の償いである、と、そんなふうにかんがえるのが一枝の性質であった。しかし意気地のない瞬吉は、貧乏がこわくて、勤めさきである新聞社をやめる決断がよういにつかない。いったい、そのころは出版界、ひいては文壇も、不況のどん底にあった。すぐれた才能をもちながら、文壇にでることができず、妻子をかかえて飢餓寸前においこまれながら、文学に精進しているような青年が東京にはたくさんいた。その日の米代や、医薬代にも事欠くのは、瞬吉の仲間ではふつうのことであったが、その群のなかにとびこむ勇気が、瞬吉にはようにいわいてこないのであった。そのような瞬吉を知っている一枝は、彼が一本だちになるまで自分が二人の生活費をかせ[36]ぎたい、そのことによって瞬吉の心をつなぎとめておきたいとかんがえていた。しかし瞬吉どころか、彼女が一人食ってゆくことさえ不安な状態に彼女はおかれてある。彼女のつとめている商工団体は、不安定な組織であり、彼女自身、いつ馘になるかわからない。

「ね、新聞社をやめて小説をかいていって頂戴。」

口癖のように彼女は云っていたが、瞬吉の勤めをやめさせ、自分が現在の俸給をうしなったとき、二人はどうやって暮しをたてゆけばいいか、一枝には方策もない。彼女はなやんでいたが、その悩みをうちあければ、憶病な瞬吉は脅え、勤めをやめて小説をかいてゆくどころか、彼女からもはなれる危険がある。彼女はそんなふうにかんがえていた。そしてそういう彼女にとって、金は大きな問題であり、それが前にかいたような夢をみた原因なのであった。[37]

そんな金のことばかりかんがえている一枝は、しかし性格的にはひどい浪費家であった。苦しさをまぎらすために、そのころ二人は毎夜のように、芝居や映画をみにいったり、郊外へドライブしたりした。瞬吉のわずかな俸給と、月月故郷の父が送ってくれる補助のための金、それに一枝は、わかい女性としてはかなりの高給をもらっていたが、それらは全部そのような娯楽につかいはたしていた。その上、一枝はなけなしの金をはたいて、洋服や着物やをよくつくった。瞬吉にも着る物を新調することをすすめ、あれやこれやで金策にはいつも苦労していた。

一枝にわかれてずっとのち、戦後、文士の講演旅行が流行するようになった。一枝も仲間の文士や画かきたちと地方によく講演旅行にでかける、そんな消息を瞬吉は故里にあって、きいていたが、彼女と行を共にした誰かがかいた旅行記の一つを瞬吉はよんだことがある。それによると、わずか数日の旅に、一枝は十数枚の訪問着や部屋着を持参してあるいた。そして日にいくどもきがえる、おどろいた、という意味のことがかかれてあった。[38]戦後、一枝はアメ

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

不景気にくるしみ、町には失業者の群があふれていた。人の心をひやりとさせるような、[30]自殺団体が現れたのも、そのような暗い虚無的な世相を反映してのことであったが、瞬吉自身も希望のない時代のなかに、先の眼当てのない一枝との恋愛にくるしんでいる。動揺した魂をもてあつかいかねていたが、情熱をもちうる積極的な目的でさえあれば、それは死であってもかまわない、先はまっ暗であるが、その暗[31]闇のなかに、勇ましく太鼓をうちならして、「死のう、死のう」ととびこんでゆく、その行動的な積極性が、瞬吉の心をつよくひきつけたのである。

△――――――――△

そんな瞬吉にくらべると、一枝のほうは、彼女自身の生得的なものに加えて、M氏の思想に影響をうけてきている。どのようにつらく、悲しいことがあっても、それに耐え、明るい方面向にむけて手をさしのばしてゆくといったふうの、素朴な人生肯定の考えをもっている。その生きる強さは瞬吉には驚異であった。そのような一枝も、しかし瞬吉の弱い、動揺した考えや気もちやに、神経をみだされがちであった、その上、相手の意志や感情やをねじふせて、自分へひきつけていることにたいしての反省や悲しみがあった。不幸な気もちから、浅い眠りの夜がつづき、よく夢をみた。朝の食卓にむかっている彼女は、寝不足の充血した眼で、夢見の話をすることが多かった。婦人記者として純白のダスタアをひるがえし町[32]をとびまわっている彼女には、いかにも似つかわしくないことであったが、夢見によって吉凶の占いをするような、おかしな古臭さが彼女にはあった。

「ゆうべは、大阪ビルのエレベーターのなかで、ドストエフスキーに会ったのよ。そうしたら、ドストエフスキーは、山杉さん、しっかり頑張っていいものをかいてくださいよ。そういってわたしの肩をたたいてくれたわよ。」

いくらか照れながらそんな話をして、瞬吉を失笑させたこともある。つづいて夢の話であるが――。

生きたまま、一枝は棺桶のなかに葬られていた。棺桶のなかは、美しい、色とりどりの花ばなで、かざられてあった。あたりには仏教の奏楽と、放鳳鳥の羽ばたきの音とが静かにきこえていた。間もなく、棺桶の蓋がしめられ、釘がうたれた。一枝は息苦しくなってきた。

「あんまりくるしいので、あなたをよんだけ[33]ど、あなたは返事もせずに、背をむけ、ずんずん部屋をでておゆきになったわ。」

また、ある夕方、瞬吉と一枝とは、郊外のひろい草原の、草の穂のなかにすわっていた。つめたい風が二人の傍を吹きぬけていった。

「金がない。金がない。金がなくてさびしい。」

笛をふくような声で、瞬吉は一枝にくりかえしかきくどいていた。すぐ傍を、美しく彩られた、大きな、長さ二間もあるトカゲがよぎっていった。

「お金のことなら、心配しなくてもいいわよ。あたしがなんとかしてくるわ。」

瞬吉のもとを、一枝ははなれた。しばらくして、もとの場所へもどってみると、瞬吉の姿はなく、彼の黒い、つやつやした髪の毛が、叢のなかに、一握りのこっているだけであった。

「ああ、やっぱり…。」[34]

悲しくゆがんだ顔で一枝はうなずいた。瞬吉はのち一枝のかいたものでそのことを知り、意外だったのであるが、そのころ一枝は気の弱い瞬吉を、自殺においこむのではないかという不安に、つねに

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

あまいといわれるかもしれないが、瞬吉は自分自身の経験から、すくなくとも自分だけはそのように彼女を信じたいと思ったのである。人生にたいする原始人的な素朴な情熱、そのためにどうしても世間の枠からはみだしてしまう無器用な悲劇性、世間から彼女が誤解された一つの大きな原因は、そこに在ったと、瞬吉はかんがえる。

そのような彼女にくらべると、現代的な青年である瞬吉は、はるかに世間智と保身の術とにたけている。アパートでの彼女との生活がはじまってから、瞬吉はいつもそのことを反省していた。尊敬という言葉はおかしくきこえるかもしれないが、自分自身にひきくらべ[27]、そのようにひたむきな一枝に、瞬吉は心をひかれており、その一途さを尊重したいとかんがえたのであった。しかし、それは愛情とはちがった種類のものであり、愛情は努力によって生れるものではなかった。一枝との関係を、瞬吉は諦めのなかで是認しようともつとめてみた。しかしあきらめきれなかった。

町の通りをあるきながら、わかい、はなやいだ少女を眼にしたときなど、

「こんな少女を、俺にだって愛する資格はある。」

かんがえる。すると一枝にたいしてというよりか、不幸はな一枝との結びつきが、やりきれないほど腹だたしくなってくる、どうすればいいのか、瞬吉は自分自身がわからなくなってくるのである。勤め先の帰り、一枝とのことに頭をなやましながら、銀座の通りをあるいている。轟と、不安な、おびやかすような音をたて、電車がすぐ傍をかすめてゆく。[28]あやうく瞬吉は身をかわす。電車がのこしていった風にあふられ、足もとがゆらめく。

「こんなところで死んだりしては犬死だ。」

ハッと瞬吉は気をとりなおす。

一枝を愛することさえできたら、彼女だけではなく、自分自身も救われる。それができないのは、自分が恋愛不能者だからではないか、あるいは素朴に、恋愛に没入できないのが近代というものであろうか、などと瞬吉はかんがえてみる。憂愁と不安とにさいなまれながら、

「いまはなにも先のことはかんがえまい。一枝の出現は自分にとっては、さけることのできない運命だったのだ。その運命に足並みをそろえてゆけば、いつかはひろい世界にでることができるかもしれぬ。」

強いて、瞬吉は自分にそう云いきかせた。

そのころ、死のう団という、異常な宗教団体の木気無気味な行動が、新聞紙上をにぎあ[29]わしたことがあった。その団体の行動に瞬吉はつよく心をひきつけられた。死のう団員たちは、白い衣を着、手に手に法華経のそれにた太鼓をうちならしながら「死のう、死のう」とさけんで町中をあるきまわったり、宮城前広場や湘南海岸にあつまったりする。一種の宗教類似の自殺団体であるが、治安をみだすものとして、そのうち検挙された。瞬吉がつとめている新聞をはじめ、その他の新聞にそんな記事がでたが、まるでチベットあたりの行者でもつけるような、ターバンにた布で頭をまいている団員たちの写真を紙面をでながめたとき、瞬吉は胸をつかれるような興奮にそそられた。団員のなかには女もまじっているのである。

いったい、そのころは、日中事変の前のころのことで、わが国は、政治も、経済も、あらゆる面でゆきづまっていた。中小企業者は

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

なかった。彼女とともに暮した当時のことを想いだし、瞬吉は彼女のために弁護してやりたい気もちでいっぱいになった。彼女がひたむきであったのは、もちろん瞬吉の場合ばかりではない。愛する男にたいする純粋な献身は、M氏の場合もおなじことであった。

むかし、一枝のかいたものによると、彼女がM氏に愛されていたころ、M氏は彼女のために家を一軒あたえていたようである。毎日[23]、時間をきめて、M氏はその家をたずねる習慣であったが、そのような二人の関係が世間に知れたとき、彼女はM氏の二号であると批難された。遠く朝鮮で小学校の校長をしていた昔気質の彼女の父親は、そんな娘のもとへ短刃を小包でおくってよこした。

「これで自殺しろ。」

その話を、瞬吉は一枝から直接きいたのであるが、そのような外部からの圧迫にたえて、一枝はM氏への愛情をつらぬいた。そのころの二人の生活をかいた一枝の作品がある。記憶に誤りがなければ、それはつぎのような題材でかかれてあった。

一枝の隠れ家へ、M氏がたずねていたころ、M氏の帰宅の時間がせまると、彼女は相手のインバネスや、帽子やをかくしたり、前にたちはだかったりしてひきとめようとする。人の善いM氏は、わかい愛人の、そんな一徹な仕草にとまどいながら、家にかえしてくれるように懇願する。M氏がかえったあと、一枝[24]はまるで気がぬけたように、部屋の畳の上へへたへたと座りこむ。部屋はいつの間にか夜の闇にとじこめられているが、そのことに気づきもしなければ、気づいていても電燈をつける気力もない。呆けたような一枝の頭に、そのうち、だしぬけに嵐のようなはげしいものがふきあげてくる。

「いまごろ、M氏は家庭でどんなにしているだろうか。」

無我夢中に下駄をつっかけ、家をとびだすと、彼女はまるで夢遊病者のように、省線電車にのって、遠い郊外のM氏の家の附近へと足をはこぶ。道ばたの、M氏の家の生垣の外から、中の様子をうかがうと、窓のガラス障子には明るい電燈の灯影がうつっている。M氏や、家族やの姿こそみえないが、その灯影は、いかにも内部の団欒を物語っている。氷室のようにひんやりした自分の家とは比較にならない、家庭の暖かさがそこにはある。M氏にたいするはげしい嫉妬の念と、家人にた[25]いするつよい憎しみの感情とが、一枝のなかをかけめぐる。すぐ眼の前にみるその家にマッチで火をつけたい凶暴な思いに一枝は身をやかれる。恋にくるって、身をほろぼした八百屋お七の姿が浮かんでくる…。

八百屋お七を連想するところに、彼女の古さをかんじはするが、それにもかかわらず、その作品をよんだとき瞬吉はつよく心をうごかされた。その作品へ感動したことも、はじめは彼女へ心をよせた一つの原因になっていたかもしれぬ。

M氏との経緯があったころ、一枝は一日じゅう家のなかにとじこもって、男の来訪をまっているのがふつうであった。表の小径に下駄の足音がきこえるたびに、M氏ではないか、とハッと聞き耳をたてる。しかし、ほとんどすべての足音はそのまま、無情に表を通りすぎてしまう。そんな時間の繰り返しであったが、そのような蔭の女の悲しみをかいた彼女の作品をよんだ記憶も、瞬吉はもっている。[26]

愛する男のためには、すべてのものを犠牲にしてささげつくす、すくなくとも瞬吉が知っていたころの彼女は、そういう女であった。彼女の死後、男出入りの激しさについて、世間は彼女を批難したが、関りをもった一人一人の男性に、誠実と献心とをつくした、

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

になったりしてはたらいていたが、M氏と知りあい恋(関)愛係におちいったのはその後のことである。べつだん人に耻じねばならぬ過去であるとは思えなかったが、そんな過去のために、自分ではふつうの結婚ができないとかんがえているとすれば哀れである。それにしても、そ[19]のような理由によって、強引に自分を結婚にひっぱりこもうとしているのが事実なら、不愉快である。前夜、彼女をアパートにとめたことは彼女がKさんに語った打算におちいる第一歩だったのではないか、坂道をおりながら、瞬吉にはふっとそういう疑いがわいてきた。

いやな、おもい気もちであるいていると、靴のつま先に、石ころがあたった。寝不足の、つかれている頭は、そんなささいなことにもいらいらしてきた。やりきれない気もちを吐きだしでもするもののように、瞬吉は道の上にペッと唾をはいた。その動作には一枝へのつよい憎しみの感情がまじっていた。とたんに一枝はとどまりにくいハイヒールの足を、坂径にふみこたえ、たちどまった。トゲトゲした顔で瞬吉をにらみつけた。

「わたしをそんなに汚いものにあつかわないでちょうだい。」

唾をはいた感情が、そのままそっくり相手[20]に反映したのだが、瞬吉には不思議な気がした。

その日も、その翌日も、一枝は瞬吉のアパートにとまり、けっきょく、そのまま居ついてしまった。世間態をはばかる意味もあって、他に一室をかりうけていたが、食事は瞬吉とおなじい部屋でとった。

「あなたはわたしを食いものにして、成長してゆけばいいんだわ。わたしはあなたに、大きな傷をあたえたけれど、その傷であなたがりっぱな作家におなりになればそれでいいんだわ。」

それをせめてもの償いにしたい、一枝は繰り返しそう云った。その言葉はいぜん妻子のあるM氏が、わかい愛人であった一枝をいたわり、はげますために、ささやいたそれにちがいなかった。そうかんがえると、瞬吉には苦笑ににた思いがわいてきたが、それはそれとして、愛することのできない女と、世(間)にかくれて同棲ににた生活をおくっている、大義[21]名分をもたない瞬吉にとっては、一枝のそんな言葉は、一種の救いになった。

アパートでの生活がはじまってのち、瞬吉に仕える一枝の奉仕は献身という言葉がそのままあてはまるようであった。

夜、勤め先の新(聞)社から、瞬吉はぐったりとつかれはててかえる、それから小説をかくために机にむかう。そんなとき、一枝はまめまめしくお湯をわかして金盥ではこんでき、熱いタオルで、彼の足をくるんでくれる。また瞬吉がなに気なくアイスクリームがたべたい、などとつぶやくと、それがま冬であっても、一枝は、

「ちょっとまってて、ちょうだい。」

いそいで坂径をおり、タクシーをとばして、銀座から瞬吉がほしがっているものを買ってきてくれる。そのような彼女に接するとき、瞬吉は、

「一枝を愛することができれば…。」

思わず吐息をもらす。彼女ほど一途に自分[22]を愛してくれる女性には、おそらく今後一生めぐりあうことはあるまい、かんがえると、思わず涙ぐむ―。

瞬吉と知りあう前もそうであったが、瞬吉とわかれたのち、一枝は何人かの男性と恋愛(関)係にあったといわれる。一枝の死後、新(聞)や雑誌は彼女のそんな男性(関)係をはげしく批難した。しかし男性にたいする彼女のひたむきな愛情や、献身やを知っている瞬吉は、世(間)の声といっしょになって彼女を批難する気には毛頭なれ

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

恋愛(関)係も、その人に妻子があるために悲[15](劇)的な結果におわった、そんな過去の経(歴)のつかみかさねがあっての、一枝の言葉にちがいなかった。

相手の冷たさにたえかねた一枝は、(間)もなく、ふたたびトランクをさげると、追われる犬のように部屋をでていった。自殺するのではないか、ふと、そんな考えが瞬吉の頭にひらめいた。あわてて、瞬吉はすぐに、彼女のあとを追い、玄(関)へとでていった。原因そのものによるよりか、原因によって生じた精神や神経の衰弱が、ときに人を自殺にみちびくことはあっても、精神や神経やが正常でさえあれば、人生の苦しさにまけて自ら死ぬことは、ふつうの人(間)にはないことである。その後の体験によって、現在の瞬吉はそう確信している。男にすてられたことによって、一枝が自殺するかもしれない、などとかんがえるのは、瞬吉のわかい、あまい考え方にすぎないのであった。しかし、滑稽にも、そのときの瞬吉は、そうはかんがえなかった。玄[16](関)から一枝をつれもどすと、その夜は自分の部屋にとめたのであった。

いく年かたち、瞬吉と一枝とがわかれたのち、その夜のことを一枝も小説にかいたが、それにはつぎのような意味のことがかかれてあった。

「どこか泊るべき宿屋の名を、瞬吉は指示するか、あるいは突きはなして放っておけばよかったのだ。そうすれば自分のことは自分で処理したのだ。その結果、あるいはかえってその後の二人の暗い、悲しい生活ははじまらなかったかもしれないのだ。そんなことさえできないほど、瞬吉という男は気が弱く、世(間)知らずなのであった。」

翌朝、瞬吉と一枝とはつれだって、アパートをでた。一枝は中小企業者たちが組織しているある商工団体につとめており、そこの機(関)誌の編集をしていた。その傍ら小説をかいていたのである。アパートから下の電車通道へと通じる坂道を、二人は肩をならべておりて[17]いったが、前夜、一枝をアパートにとめたことが、このまま二人の將来を決定づけることになるのではないかかんがえると、瞬吉の気もちはおもかった。

あいまいな一枝との(関)係に、瞬吉が煩(悶)していることに新(聞)社の上役であるK文化部長はいぜんから同情していてくれる。

「君と山杉さんとでは、結婚してもうまくはゆくまい。万一わかれるようになった場合、山杉さんならたちあがることができる。しかし、君のほうはおそらく、破滅するにちがいない。」

強気な一枝の性格を知っているKさんは、そんな云い方で彼女に深入りしないようにそれとなく瞬吉をいましめていた。

「あまり強引に瞬吉君をひきづってゆかないように、僕は一枝さんにたのんだんだ。するとね、一枝さんはわたしはこんな方法ででもなければ結婚できないんです、ってそういってたよ。そんな気もちの一枝さんの犠牲にな[18]るのはよしたほうがいいね。」

そうもKさんはいった。

朝鮮の女学校を卒業したのち、一枝は結婚した(経)験をもっている。瞬吉にはひたかくしにかくしていたが、彼女と知りあってのち(間)もなく、彼女の作品や、言葉の端端々から、瞬吉はそのことを知っていた。母親に強制されての結婚であったが一枝の書いたものによると、紋付をきた花婿と花嫁とは提灯の灯を先頭に、ポプラ並木を行列していった、狐の嫁入りのような古風な結婚式であった。この結婚の相手をきらって、一枝は新婚(間)もなく東京ににげだした。東京にでた彼女は、YWCAにつとめたり、婦人新(聞)の記者

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

になってうかんでくる。するとたちまち、相手がうとましくなってくる、どうすることもできないのであった。一枝はやわらかいが、しかし大きな、骨の太いロシアの農婦のような手をもっている。印象的で、はじめは、その手が瞬吉には、一種の魅力にさえみえた。しかし、吉祥寺の宿で彼女への愛情がさめたのちは、その大きな手のつよい把握力からどうすればにげだすことができるか、そのことばかりかんがえるようになっていた。その後なん年かの間、瞬吉と一枝とは、二人の愛や悲しみやについてかたりあう機会がいくどもあった。その繰り返しに日日をすごしたといっていい。あるときは心をよせあい、またあるときははなれた気もちで…。それから瞬吉はまた、一枝とのいきさつを題材にした小説も幾篇かかいている。しかしその寝顔の印象[12]についてだけは、彼女にかたることも、筆にすることもできなかった。

小石川の高台にある瞬吉のアパートへ、ある夜、トランク一つさげた姿で、一枝が訪ねてきた。彼女をむかえる瞬吉の眼は、まるで侵入者でもみつめるように、つめたく、きびしかった。その視線のなかへやっとの思いでふみこむと、一枝はドアのまえの入口のところに、遠慮がちにすわりこんだ。疲れのために眼の縁がくろく隈どっており、その姿は雑布のように惨めにみえた。

「あたし叔母の家をでてきたのよ…。」

あえぐように、一枝はいった。一枝の叔母というのは、税務官吏の未亡人で、ちょっとした家屋敷と、小金とをもっている。小学校の女教員上りということであったが、話をするときの、身ぶり手ぶりが大きい。それだけでも瞬吉には苦手の種類[13]の人であったが、そんな婦人が一枝の背後についていることがも、瞬吉にとってはいぜんから気のおもいことの一つなのであった。

「瞬吉さんとは、いったいどうするつもりなのか、ちゃんと決りをつけて、はっきり結婚してもらいなさい、そういって叔母はせめたてるんです。自分のことは自分で仕末をつけます。わたしはそういいすてて、今日は家をでてきたんです。」

結婚という言葉を耳にした瞬間、瞬吉はギョッとした。

「結婚だなんて…、はじめからいってるように、僕はそんなこと、かんがえてやしない。君たちがそんな気でいるんなら、やはり、いまのうちにちゃんと精算しなくっちゃあ。」

「ええ、わかってるわ、わたしの気もちがちゃんとするまで…。わたしがひとりだちできるまで…それまでいいのよ。それまですてないで…。」

しのび泣きの声を一枝はあげはじめた。め[14]ったに涙をみせることのない気のつよい彼女には珍しいことであった。間もなく嗚咽のなかから、彼女はふっともらした。

「男女の仲なんて、やはり法律でしばられていないとだめなのねえ。」

法律という、ききなれない言葉を耳にした瞬間、瞬吉はまるでするどい刃物で皮膚でもきられたような脅えをかんじた。世間的な、強気の叔母が一枝にはついている。女をすてたという理由によって、自分は法律から罰せられるのであろうか、そのことに無知な瞬吉は、滑稽にも体がふるえだしてきそうな気がした。しぼりだしたような声で、瞬吉はうなった。

「法律だなんて、そんな下品な…。」

「いいえ、そんな…。わたしのいう意味、男女の関係は、夫婦という法律できめられた形でなければ、けっきょくだめになってしまうんだということ…。」

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

定感や欲望やをしめしていた。盲腸炎がやぶれて大手術をしたことがあるが、そのとき彼女がしめした生への執着のはげしさに、瞬吉はおどろいたものである。わかく、気が弱く、人生にたいする脆さをかこっていたそのころの瞬吉にとっては、人生にたいする彼女のそんな欲望のつよさは驚異でさえあった。驚異は一種尊敬にに感情に変っていった。ついでにいっておけば、そのころ、瞬吉が一枝とぬきさしな[8]らぬ関係におちいったのも、異性への愛情からというよりか、むしろそんな人間的な敬愛の念に根ざしたものなのであった。

一枝の死についての、瞬吉の感想が新聞にのったとき、その文章をよんだ友人の一人は、

「冷淡だね。」

と、いった。冷淡であろうか。冷淡とは、また冷淡でないとは、どんなことか。

(二)

二十年まえ、瞬吉は新聞記者であった。瞬吉と一枝とは、東京の吉祥寺公園のなかの小さな宿屋にとまっていた。一枝は羞いをふくんだ媚態でよりそってくると、

「色は年増にとどめさす、という言葉をごぞんじ…。」

あまい、こびるような声で、瞬吉の耳もとでささやいた。

暁け方ちかくのま夜中、瞬吉はふと眼がさ[9]めた。煙草をすうために、枕元のいきな行燈型の電気スタンドに、スィッチをいれた。かたわらに、一枝は死んだようにねむっている。明りのなかに、うかしだされた一枝の顔に、なに気なく、眼をやると、額には脂汗がうかんでおり、あれた肌に、皺が幾筋もよっている。一枝は三つ年上の丙午のはずであるが、じつさいの年齢よりか、五六歳も齢上のようにみえる。女が年上であることに、瞬吉はべつだんこだわりはもっていない。しかし、その荒れた肌を眼にした瞬間、相手にはっきりと年上をかんじた。いつもは化粧の下にかくされている、みにくい女の素顔をはじめて知って、瞬吉はいやな、たまらない気がした。のっぴきならない関係におちいったことに、つよい後悔をかんじたのである。宿をおおっている高い、杉木立の間から、ときおり無気味な夜鳥の啼き声がきこえてくる。後悔のために、そのあと、瞬吉はよういにねつかれなかった。[10]

翌朝、つれだって杉林のなかの小さな宿屋をでていった。あたりの原っぱや小径一面には、秋のあかるい太陽が隈なくてり映えていた。原っぱいちめんにみだれさいている芒の穂には、朝露がたまっており、その露の一つ一つの玉にも、陽の光は反射していた。そんなかげりのない明るさのなかで、瞬吉だけが暗い、不機嫌な顔をしていた。

「ね、後悔なさったの…。」

どんな理由で、相手の青年が不機嫌な顔をしているのか、原因がつかめない一枝は、そのうち自分もいらいらしてきた。

「あなたはわたしを、喰い物にして、あなたの文学をそだててゆけばいいんだわ。」

人間の愛憎というものは、とるに足りないこと、たとえば眼や口やのちょっとした形、手足のかんたんな動き、そんなことが、決定的な要素になる場合だってあるものだ。吉祥寺の宿屋で一夜をあかしたのち、瞬吉と一枝とは人知れず、町なかや、郊外のホテルや[11]宿屋で、逢曳きをかさねていたが、そのたびに美しく化粧されている一枝の顔の底に、いつか吉祥寺の宿でみた彼女の寝顔が二重映し

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

にかかれてあるような尊敬という言葉とはちがった種類のものであるはずだ。尊敬という言葉を、そのまま素直にうけとっていいか、どうか疑惑の念と、それを否定する気もちとがつよくはたらいた。それはとにかくとして[4]、瞬吉は一枝あてに見舞の手紙をかくためにペンをとった。それにしても、いまはすでに過去の影像となり終せている女性に、いったいなにを、どのような気もちでかけばいいのであろう。手紙の文章として、頭にうかんでくるどの言葉を吟味しても、白白しい想いをどうすることもできなかった。しかも死に直面している人間に、そのことを暗示する文字をつかうわけにはゆかぬ。ペンをにぎったまま、瞬吉は自分自身のおかれている立ち場に、一種の焦だちをかんじた。けっきょく、偽りのない心でかくことができたのは、わずかに、

「神のみ手にすがり、心安らかに療養してもらいたい。」

ということ、ただそれだけであった。

いぜん、一枝と瞬吉とは救いのない恋愛(関)係にあったのであるが、そのころ、一枝はその苦しさからのがれるために、聖書をよんでいた。そのことを瞬吉は、べつだんふかく気[5]にもとめなかった。しかし、一枝とわかれてのち、故里で大病をし、ベットにくくりつけられていたとき、瞬吉もはじめて聖書を手にした。死の不安に脅えていた瞬吉は、聖書をよみながら、涙ぐんだこともいくどかあった。そんなとき、瞬吉はむかし、その宗教書をよんでいた一枝の姿をよく思いだした。そのころの一枝の苦痛が、どんなに大きいものであったか、はじめてわかるような気がしたのであった。そんな過去のいきさつから、瞬吉は一枝が死を前にして、カソリックに入信した気もちを理解することができた。また、自分ではどうしてやることもできない一枝の苦痛を、神の責任において肩代りしてもらう、いわば責任のがれに似た一種の安堵感をおぼえたのであった。

手紙にわずかばかりの見舞金をそえて、瞬吉は一枝の女祕書におくった。

見舞状をおくってのち、一週(間)ばかりたって、一枝は死んだ。そのことを瞬吉は、ラジ[6]オと新(聞)とで知った。一枝の死についてなにかかくようにという依頼もM新(聞)からうけた。その依頼をうけたとき、そのときも瞬吉はこまった。死いっぱんについては多少の感想をもっている。しかし、山杉一枝の死について、いまさらなにをかくことがあるというのであろう。おもいペンを、瞬吉はとった。

「山杉一枝という人は、僕が知っていたころは、生につよい執着をもっている人であった。その山杉が死んだことに僕は一種の感慨をもつ。しかし生の苦痛から、彼女が(開)放されたことをかんがえると僕はほっとする。さきごろ僕の母親が死んだときも、僕は同様の感想をもった。」

夫の放埒のために、瞬吉の母親は生前不幸な生活をおくっていたが、息子への愛情ただ一つを頼りに生きてきた。そのような母親を、瞬吉も心から愛しており、母親が死んだのち、病身な体ではたして生きてゆけるだろうか、そんな不安にいつもおびえていたくらい[7]である。しかし、二三年まえ、じつさいにその母親が死んでみると、自分でも意外なくらい、平静であった。生の苦痛から彼女が解放されたことにたいする安堵感や、喜びやがつよかったからである。

一枝は、瞬吉を知るまえにも、文壇の大家であるM氏と恋愛(関)係にあった。M氏には妻子があり、その恋愛も悲劇的であった。しかし、生得的な気質の上に、理想主義的なM氏の影響をうけたのか、瞬吉と知りあったころ、一枝は人生にたいして、つよい肯

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

‖遺稿‖

発端（ほったん）

(一)

田舎住まいをしている瞬吉のもとへ、東京の未知の女性から、とつぜん手紙がとどいた。手紙は勤め先の机の上においてあった。いぶかりながら封をきり、文面に眼を通したが、読みおわった瞬吉の心は、衝撃にちかいものをうけていた。手紙にはつぎのような意味のことがかかれてあった。

「とつぜんお手紙を差上げる失礼をおゆるし下さい。私は山杉一枝先生の祕書をしている者でございます。ご存じですか、どうですか、山杉先生は、只今肺臓癌のために、危篤の状態にいられます。もう御口もおききになれず、人の言葉にやっとうなずいておられるだけでございます。先頃からカソリックに入神されていましたが、二三日前、洗礼をもお受けになりました。私達周囲の者は、今は先生が静かに昇天されることを、祈っているばかりでございます。

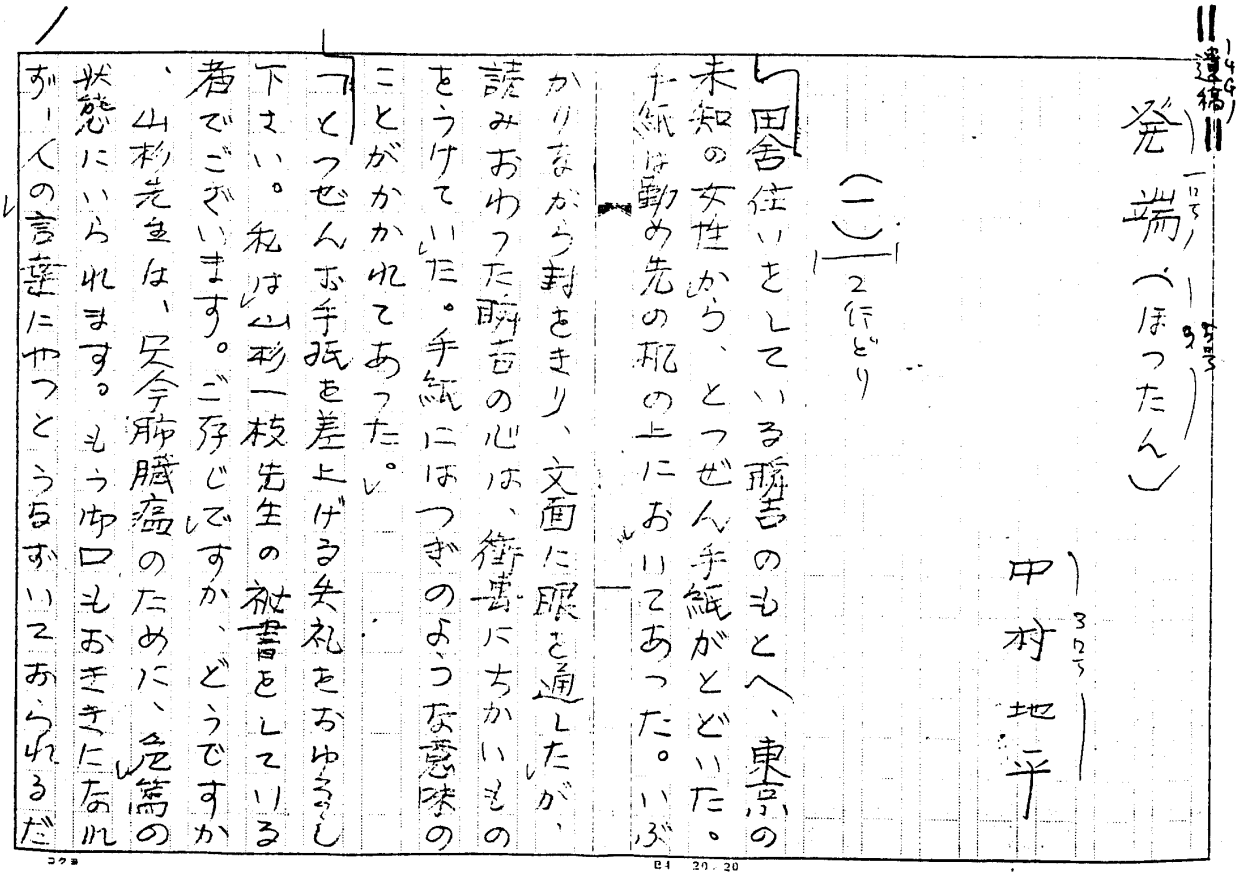
山杉先生は今でも瞬吉先生のことを、ずいぶん尊敬していられます。以前から、私は何度か山杉先生から、瞬吉先生のことをお伺いしておりました。神の御召しがある前に、先生から御見舞の言葉を差上げて頂けますなら、山杉先生はどんなにお喜びのことでしょう。今日は失礼をも顧みず、山杉先生の御近況をお報らせすると共に、その事をお願いするために、この手紙を書きました。」

女流小説家である山杉一枝が大病でねていることは、瞬吉も新聞や雑誌の消息欄で知っていた。またその治療費をつくるために、文壇で義捐金があつめられたことなども、耳にしていた。しかし、一枝の病気が、そのようにさしせまった状態にあるとはかんがえていなかった。意外であったが、彼女が死に瀕していることをかんがえると、やはり胸が痛くなってくるのをどうすることもできなかった。しかし、意外といえば、一枝がいまなお瞬吉のことを念頭においており、死の直前であるいまなお彼の名前を口にしているというのは、もっと意外であった。一枝と瞬吉との恋愛は、若かったころの二人にとっては、たしかに大きな出来事であったし、死を直前にして過去の人物を思いだすのも自然なことであるにちがいない。しかし、二人がわかれてのち瞬吉も一枝もいくつかの人生をのりこえてきている。その後、男性との複雑な経歴を経てきていた一枝の胸に、遠くはなれている瞬吉が、大きな比重ですまっているとは、とうていかんがえることはできなかったのである。

東京で小説を書いていた瞬吉は、一枝とわかれたのち、報道班員として南方に派遣された。帰国して、現在の妻と結婚し、子供も三人生れた。戦争の末期には、疎開のために故郷にかえったが、戦後、大病をしたために、出京を思いとどまらなければならなかった。無理はできないが、いまはどうやら病気もいちおう恢復した。弱い体で、そのまま故郷の町の小さな会社につとめているのである。いっぽう一枝のほうは、戦後は大きな新聞の身の上相談欄を担当し、それが好評で、小説家としてよりか、むしろ女流名士としてジャーナリズムの上に活躍している。そんな一枝の頭に、過去の人間である瞬吉の影像が、どのような形でのこっているか、彼には想像つかないことであった。お互に、消しがたい傷跡をのこした人間として、彼女の心の一隅を占めていることはたしかであろうが、それは手紙

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College


遺稿

発端（ほったん）

中村地平

（二）

田舎住いをしている病者のもとへ、東京の未知の女性から、とつぜん手紙がとどいた。手紙は勤め先の机の上においてあった。いぶかりながら封をきり、文面に眼を通したが、読みおわった病者の心は、衛生にちかいものをうけていた。手紙にはつぎのような意味のことがかかれてあった。

「とつぜんお手紙を差上げる失礼をおゆるし下さい。私は山杉一枝先生の秘書をしている者でございます。ご存じですか、どうですか、山杉先生は、只今肺臓癌のために、危篤の状態にいられます。もう御口もおききになれず一人の言葉にやっとうなずいておられるだ

中村地平「発端」自筆原稿

中村さんの奮斗ぶりがうかがわれて、ぼくはその夜はなかなか寝つかれなかった。まさしく『発端』は、ライフワークにふさわしい題名であり、或いは、中村さんの再出発の気概をうかがわせるものである。くらい、それでいて書いておかねばならぬ歴史のなかの人間模様、作家としての中村さんの鋭い眼がのぞいている。中村さんは、ぼくたちと歩いていると、興味のある風物や人間に出会うと、立ちどまってじっと大きな眼で見つめられた。そんなときの中村さんの姿が、ほうふつとして浮かんでくる。とにかく、ぼくとしては、この『発端』を完成させたかった。泉下の中村さんも、おそらく『残念だった』といわれているにちがいない」

中村地平は昭和三十八年二月二十六日、五十五歳の若さで死亡している。平成六年春は、中村地平が去ってから三十年以上の年月を経てしまったことになる。今回の資料が、今後の中村地平研究の一助となればと思い、まとめてみたしだいである。

㊟

1 文中横線数字は原稿用紙枚数を表す。（例1～77）

2 そのときもは推敲の後、消したことを表す。

3 △記号は推敲の後、挿入した言葉を表す。

4 ○記号は略字で書かれたことを表す。

聞（聞）欄（欄）間（間）歴（厂）開（開）悶（悶）劇（刂）経（圣）

関（関）闇（闇）問（問）銭（戔）門（门）個（個）職（耘）働（仂）

点（点）魚（魚）

5 筆者の漢字使いに、次のような特徴がみられた。そのままの形で表した。

軍（撃）祕（秘）癌（癌）魅（魅）画（画）懸（懸）离（離）儀（議）

耻（恥）

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

宮崎女子短期大学紀要　第20号　1-29頁

資料・作家　中村地平

―遺稿「発端」と年譜―

矢口裕康

1　遺稿「発端」

「発端」は中村地平の最後の小説と思われる。昭和四十六年『ポリタイヤ』第十号（特集　坂口安吾・中村地平）に報告されているが、今回の試みはその報告を基礎資料として、昭和五十八年久保輝巳氏より提供していただいた自筆原稿コピーを照らし合わせてみたものである。中村地平は小説執筆の際口述筆記という形をとったり、また自筆原稿とした折も発表後すぐ焼却処分としてしまったようで、自筆原稿を目にできるのは貴重なことといってもよい。中村地平作品化の軌跡をしる資料としても、作家の筆運びをすべて忠実に再現してみたしだいである。全体で四百字づめB四版原稿用紙七十七枚であるが、六十二枚以降は後述筆記の形をとっているようで、筆遣いが変化している。

黒木淳吉は、「遺稿について」（『ポリタイヤ』第十号）として、「発端」誕生のいきさつについて次のように記している。

「（前略）それはともかく、延岡の宿で、退職の話をきいたとき、いくらか、ぼくは不機嫌であったらしく、中村さんは、ぼくの気をそそるように、いま考えているライフワークの話をされた。『くらい戦争中の話だが、ぼくは軍用列車が走るのをきくところから始めたいんだ。どうにもならない男と女の生活と、その列車のひびき、そこから書き始めて、とにかく、ぼくのライフワークにしたいんだよ』（中略）その銀行を病気でやめ、自宅で療養されるようになってから、風の便りに、病気がなおったら、今度は必らず小説をかく。ライフワークを書く、そんなことが、ぼくの耳にも入ってきた。いかにも、文学者らしい、中村さんの言葉であった。ぼくは、涙が出るような感動をおぼえたのであった。しかし、中村さんは、あまりにもあっけなく、ぼくたちの前から姿を消してしまわれた。中村さんの文学全集を出す話が奥さんからあったとき黒木清次さんと同道して、お宅を訪れた際、ぼくは第一番に話をきり出したのは、そのライフワークがどうだったかということであった。奥さんが持ってこられた赤茶けた封筒のなかから、その『発端』という未完の小説が出てきた。なつかしい中村さんの字体である。ぼくはその夜、その未完の小説を読了した。原稿用紙に裏表に書かれた小説は、順序をたどるのが骨であった。しかし、力のこもった字体は、いかにも

NII-Electronic Library Service